

識別番号	P 22
研究課題	「ヨーロッパ映画における移民たち」 『上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書』 (上智大学ヨーロッパ研究所発行)、第 2 号、2008 年。
研究代表者	オプヒュルス鹿島ライノルト (ドイツ語学科教授)
共同研究者	ジャン=クロード・オロリッシュ (元上智大学ドイツ語圏文化研究所長、上智大学学生総務担当副学長)、眞鍋正紀 (上智大学非常勤講師)
Summary	The result of the symposium “Immigrants in the European Cinema” (ヨーロッパ映画における移民たち) held in May and autumn 2007, were published in 2008 in <i>Jōchi daigaku yōroppa kenkyūsho kenkyū sōsho</i> (“Periodicals of the European Research Institute at Sophia University”). The publication contains articles about a wide range of European cinema, including the discussion of British, French, German, Portuguese, Italian and other European films.

1. 本研究の目的及び背景

ヨーロッパ各国に大きな影響を与えつつある欧州統合と拡張の運動におもんばかり、2007 年に上智大学は「ヨーロッパ研究所」を設立することで、全欧州規模の社会と文化の動向の研究を開始しました。この統合のプロセスはおもに政治的、経済的な分野で進行していますが、では文化という観点から見た場合に「欧州の統合」、すなわち個々のネーション文化の伝統を超えて存在するような社会的、文化的な融合の運動は存在するのでしょうか？そう問いかけたとき、たとえばさまざまな差異を超えてなんらかの共通性をもつ「ヨーロッパ映画」なるものは存在するのだろうか、という疑問も浮上してきます。

ジャン=クロード・オロリッシュ (現上智大学学長補佐、ドイツ語学科教授、ヨーロッパ研究所初代所長)、ライノルト・オプヒュルス=鹿島 (上智大学ドイツ語学科教授)、そして眞鍋正紀 (上智大学非常勤講師) の主催で実現した、ヨーロッパ研究所の枠組みでの最初の本研究シンポジウムは、ゆえにヨーロッパへの移民運動と、それがもたらした移民問題という現象を「ヨーロッパ映画とはなにか」という設問に結びつけて論じました。「ヨー

ロッパ映画における移民たち」と題された本シンポジウムは、2007 年 5 月 12 日にその第一部が開催されましたが、本学内の麻疹の集団発生により翌日に予定されていた第二部は延期され、秋学期に 3 回に分けて開催されることとなりました。本書はこのシンポジウムの枠組みで発表され議論された各論（一部を除く）とパネルディスカッションの内容を、加筆訂正のうえで収録していました。

本シンポジウムを通じて得られた研究成果を踏まえ、2008 年 4 月 01 日から「ヨーロッパ映画における『ヨーロッパ』」の共同研究プロジェクト（外国学部ロシア語学科村田真一教授担当）が発足しました。このテーマを 5 名のそれぞれの地域の専門家が比較社会・比較文化論・精神的観点から追究していきます。

2. 本研究の方法・内容と共同研究員の役割分担

「ヨーロッパ映画における移民たち」『上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書』（上智大学ヨーロッパ研究所発行）、第 2 号、2008 年（12 月）の編集者：眞鍋正紀；
前書き：オプヒュルス鹿島ライノルト（翻訳：眞鍋正紀）

3. 研究の結果

「ヨーロッパ映画における移民たち」『上智大学ヨーロッパ研究所研究叢書』（上智大学ヨーロッパ研究所発行）、第 2 号、2008 年（12 月）

本書収録の論考のほとんどは、特定のネーション文化を背景にそれぞれの国語を基調にして作られた個々の作品の分析を通じて、ヨーロッパの「移民映画」に胚胎する複数の問題について理解を深めています。さらに本シンポジウムでの発表はそれぞれ、英語、ドイツ語、フランス語、ポルトガル語、日本語で行われましたので、本書でもその多言語性をそのまま生かし、ここに収録された各論は、上記の言語でそれぞれ書きあらわされています。

まず「映画と現実とヨーロッパと」と題された招待講演論文で狩野良規は、ヨーロッパ映画の中に描かれている移民の姿を検討するに先立ち、映画とはいかなるメディアなのかというその芸術媒体としての映画の本質を論じています。映画はどこまで現実を映せるのか、さらには「ヨーロッパ映画」なるものは存在するのかなど、本論では映画をめぐる基本的な問題が総括的に考察され、さらにヨーロッパ映画史におけるさまざまな局面がその特徴とともに解き明かされていきます。

引き続いて収録された4つの論文は英語で執筆されています。自身も映画監督であるジョン・ウィリアムズは、『I'll Have Half a Cup』 英国在住アジア系映画における自己同一性とその選択」で、1985年からこんにちに至る様々な英国映画作品において、英国在住アジア系住民たちにとって彼らが持つ複数の帰属意識、その自己同一性の錯綜が織りなす「網状」の存在のかたちと、そこで生じる矛盾と齟齬がいかに描かれているかを詳述しています。スティーヴン・フリーアーズ (『My Beautiful Laundrette』)、ダミアン・オドネル (『East is East』)、グリンダ・チャーダ (『ベッカムに恋して』 *Bend it Like Beckham*)、ケン・ローチ (『やさしくキスして』 *Aye Fond Kiss*) そしてサラ・ガヴロン (『ブリック・レーン』 *Brick Lane*) が紹介され、移民問題の関連において分析され論じられています。

『出稼ぎ野郎』と『不安と魂』 ーファスビンダーの初期作品における移民と非移民」でギーゼラ土居は、「作家映画」と呼ばれるニュー・ジャーマンジャーマンシネマ世代でおそらくもっとも卓越した監督であるライナー・マリア・ファスビンダーの二作品 (1969年と1974年発表) を取り上げて、「経済の奇跡」期以後の西ドイツ社会で生活する移民たちと、彼らに対するドイツ人たちの反応を紹介しています。移民に対する差別的態度と先入観が発生する機制が、ここでは中心的に論じられています。

ゴードン・ガムリンは「強調する差延 ーファティ・アキンの『愛より強く』における音楽の役割」で、2004年ベルリン映画祭で最優秀賞を受賞し評価の高い『愛より強く』(2004)と、ドイツに帰化したトルコ系移民の第二世代に属す映画監督ファティ・アキンのそのほかのいくつかの作品における、音楽の意味と役割について考察しています。そのさいドイツとトルコ文化を複雑に混交して構築されたアキン作品内の表現を適切に分析するために、彼はジャック・デリダがその脱構築的な解釈作業に使用した「差延 (différance ≠ 差異 difference, Differenz)」という、(ポスト) 構造主義の鍵となる概念装置に依拠しています。

オプヒュルス=鹿島の「スカーフをかぶったジュリエット? ードイツならびにヨーロッパ現代映画における若き移民女性の表象」論においては、特にドイツ (ファティ・アキン)

や英国（スティーヴン・フリアーズ）、そしてフランス（フィリップ・フォコン）とイタリア（ベルナード・ベルトルッチ）の映画作品における若き移民女性の活躍とその特徴的な性質が論じられます。ハルク・ボームの『ヤスミン』（1988）が「若き移民女性」像のプロトタイプとして取り上げられ、その他のキャラクターとの比較を通じて「若き移民女性」という表象への理解が深められるでしょう。

本書収録論中で唯一のフランス語論文となった「映画のなかの移民たちの相貌 1980-90年のフランス大衆映画 コリーヌ・セローの場合」でイザベル長谷川は、フランス人監督コリーヌ・セローを例にとり、同国の移民の現実を映画化した作品を分析しています。ドイツ語で執筆されたクリスチアン・ツェムザウアーの「ドキュメント映画『外国人は去れ！』における在来オーストリア人と外国人 ―芸術運動『どうかオーストリアを愛して』（2002）を記録したドキュメント作品の分析」は、著名なドイツ人舞台監督、兼お騒がせパフォーマンス芸術家、司会者でもあるクリストフ・シュリンゲンジーフの物議を醸したウィーン芸術週間でのパフォーマンスについて報告しています。そのさい、このリアリティ・ショー形式の複雑な「芸術」をめぐる、そこに絡め取られた移民擁護と移民排除の、そしてそれを記録する映画媒体が孕む問題の政治性に焦点が当てられています。

以下に紹介する本書収録の論考は、すべて日本語で執筆されています。浜野明大はフランスで活躍するオーストリア出身の映画監督ミヒャエル・ハネケ作『隠された記憶』（2005）を取り上げました。一見するとフランス社会に受け入れられているように思える移民たちは、実は社会的深層心理内では拒絶されている。浜野はこの事実を同作に登場する人物たちの行動に投影して読み取っています。

以下の三つの論考では、ドイツ語圏映画における移民問題が取り扱われています。「ステレオタイプからの脱却 ―90年代以降のドイツ映画におけるトルコ系移民描写の変化」で渋谷哲也は、90年代に「外国人」の属性と出自をもつ若い世代の監督たちが引き起こした「移民のイメージ」の変化に注目しています。彼ら移民系監督たちの「やや軽薄」で大衆的な作品群はトルコ系の登場人物たちを、一見すると先入観に満ちたステレオタイプの人物像に加工して演出し、メロドラマ・ジャンルにおける犠牲者として描き出します。しかしその紋切り型の演出はあえて選び取られた表現上の戦略であり、典型的で否定的な移民の描写を手がかりに、逆に繊細に構築された人物描写が成功している、と渋谷は結論しています。ドイツで活躍する若きトルコ系監督トーマス・アルスランの『ディーラー』では、ドイツの都市の日常と犯罪（組織に取り込まれざるをえない環境）のあいだで揺れ動くトルコ系移民の少年たちの生活が活写されていることを、渡辺政弥が報告しています。『移

民キャラクター』の制作思想とその受容—マスメディアの現実と商業資本主義、映画メディアの可能性—で眞鍋正紀は、おもにテレビに代表されるマスメディアを通して、「移民」のイメージがいかに構築され操作されているのかを論じています。サシャ・パロン・コーエンの問題作『ボラット』における同名の主人公と、ドイツのテレビ・コメディにおける「外国人」的な属性をもつ登場人物たち（『エルカンとシュテファン』）との比較がなされます。

マウロ・ネーヴェスは「マノエル・デ・オリヴェイラの作品におけるヨーロッパ」において、「ヨーロッパ」という、ほんらい多声的な表象であり複雑に構成されたイメージの集合体を、同監督の作品群に読み取って分析しています。

本シンポジウムの最終プログラムとしてジャン=クロード・オロリシュ教授の司会で催されたパネルディスカッションは、非常に有益で興味深い実りを結びました。それに対応する本書収録のテキストは、各パネリストのご協力のもとに眞鍋正紀によって編纂校正された同企画の記録です。議論はとりわけ映画における、そもそも「ヨーロッパ的なもの（映画）」とはなにか、それはどのように形成されるのか、という問いかけをめぐるなされました。そのさいイギリス的、フランス的、ドイツ的、ロシア的、ポルトガルの特定のネーション言語の枠組みに限定された映画文化を見わたそうとするそれぞれ別々の断片的な視点が、別の異質なネーション文化の映画と、それらに共通するヨーロッパ映画を見わたそうとする視野をめぐる議論を通して、全体として見ると補完され断片化を免れていったことが、特に大きな収穫として理解されるでしょう。このパネルディスカッションには、パネリストとして狩野良規教授（青山学院大学）、渋谷哲也氏（東京国際大学）、村田真一教授（上智大学）、吉村和明教授（上智大学）、マウロ・ネーヴェス教授（上智大学）そしてジョン・ウィリアムズ氏（上智大学）が参加されました。

目次：

はじめに	R・オブヒュルス=鹿島	1
総論（招待講演）		
映画の現実とヨーロッパと	狩野良規	7
各論		
"I'll Have Half a Cup" – Identity and choice in "British-Asian" Cinema	John Williams	37
"Katzelmacher" and "Angst essen Seele auf" – Immigrants and Non-immigrants in Fassbinder's early films –	Gisela Doi	55
Underscoring <i>Différance</i> : The Role of Music in Fatih Akin's <i>Head On</i>	Gordon Gamlin	71
Juliet Under the Scarf? – The Figure of the Young Female Immigrant in Selected Recent German and European Films	Reinold Ophüls-Kashima	105
Les visages de l'immigration dans le cinéma – cinéma populaire en France dans les années 1980-90. Le cas de Coline Serreau	Isabelle Hasegawa	123
Einheimische und Ausländer im Dokumentarfilm <i>Ausländer raus !</i> – Eine Analyse des Films über die Kunstaktion <i>Bitte liebt Österreich</i> von Christoph Schlingensief	Christian Zemsauer	127
『隠された記憶（caché）』 — 投影された現代フランスの移民問題 —	浜野明大	145
ステレオタイプからの脱却 — 90年代以降のドイツ映画におけるトルコ系移民描写の変化	渋谷哲也	155
トーマス・アルスラン『Dealer』における移民の職業生活のイメージ	渡辺政弥	167
「移民キャラクター」の制作思想とその受容 — マスメディアの現実と商業資本主義、映画メディアの可能性 —	眞鍋正紀	183
マノエル・デ・オリヴェイラの作品におけるヨーロッパ	マウロ・ネーヴェス	209
パネルディスカッション		
「ヨーロッパ映画における移民たち」		221